

2018年12月19日(水)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 松平莉奈さんWS へんなキャラクターたち—黄表紙をよむ—

1,2回目のご来館

12月19日に行われた松平さん2回目のWSでは、前回のお約束通り、黄表紙¹に登場するへんなキャラクターたちをご紹介いたしました。



2, 善魂悪魂と出会う—黄表紙を音読する—

へんなキャラクターといえはまず、ということで、山東京伝の黄表紙に登場する善魂・悪魂をご紹介することにいたしました。

彼らはそれぞれ善い魂、悪い魂を擬人化したキャラクターで、人間の体内にどちらの魂が入るかによって、その人の行動が変わります。

その様子は、初めて彼らが登場した『心学早染艸』²(山東京伝作・北尾政美^{まさよし}画、寛政2年(1790)刊)に描かれるところで、いつも善の魂に見守られている理太郎は、すくすくと善い青年に育つものの、善魂が油断した隙に悪魂が理太郎を乗っ取ってしまい悪事をそそのかすので、一転理太郎は人の道をどんどんはずれてゆく……というのがあらすじです。



天帝の吹いたシャボン玉が魂になって人間の元へ飛んで行くという設定。風で変形してしまった玉が悪魂となる。

¹ 江戸時代中～後期に出版された、大人向けの絵入読み物。

² 『山東京伝全集』黄表紙2 (ペリかん社、1993年) 所収。

2018年12月19日（水）



生まれたばかりの理太郎に入ろうとする悪魂。
親の心掛けが良いことを知っている天帝が気の毒に思い、
悪魂を捉えたために、理太郎には無事善魂が入る。

今回は、長塚さんの WS からの学びを活かして、一緒に音読して
みることにいたしました。WS には糸汐里先生（当館特任助教）も出
席され、三人で交互に音読し、私が適宜語句や絵の説明を加えると
いう形式です。

本作は、寛政の改革³を意識して作られた〈一見〉真面目で教訓的
な話ですが、声に出してみるとジョークがちりばめられていて笑
いが絶えません。松平さんは最初、絵とストーリーの頓狂さに驚いて
おられましたが、一緒に楽しんでくださいました。

³ 天明7～寛政5年（1787～93）老中松平定信を登用して行った幕
政改革。文武両道を奨励するなどし、黄表紙初期に活躍した武家身



また、本作の後編と称して売り出された『人間一生胸算用』⁴（山
東京伝作・画、寛政3年〈1791〉刊）も、奇妙な世界観です。

分の作者たちは、戯作の第一線から撤退した。

⁴ 国文研蔵

2018年12月19日(水)

作者京伝が、善魂の不思議な力で小さくなり、隣人の無名屋無次郎という男の体内に入ると、腹の中が一つの国となっており、旦那は「心」、番頭は「気」が務め、鼻、耳、目、口、手、足にそれぞれついた腰に紐を心が握り操作している、という設定……絵をみると、身体各部位がそのまま顔になった妙な人間が描かれており、ここでも衝撃を受ける松平さん。



心が各パーツの手綱を握る腹の内の世界。

本作の見所のひとつは、軽快な言葉遊びです。

たとえば、真面目すぎる「心」に飽き飽きした目、鼻、口たちが、「気」をそそのかして心を追いつく場面は、「さすがの無次郎が体も、気は変わりやすく」、その後気をおだてて皆が散財する場面では「気は大勢にたてこかされ、無性に気が大きくなり」などと、「気」にまつわる慣用句を上手に使っています。

文章を読むと比喻のようですが、実際「気」が一人の人間として画面上にいるので、なんだか妙な気分……



今回も手擦れに注目される松平さん。

(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200004024/viewer>)。画像は

『山東京傳全集』黄表紙2より転載。

3, 知と遊び

入口敦志先生（当館教授）によると、京伝はこの作品を作る時に、「気」や「心」や「口」といった、身体に関わる慣用句を集めたうえで、当意即妙にコラージュしているのでは、とのこと。狂文や俳文といった言葉遊びの文芸の世界では、テーマに沿って慣用句を集めておく手法が使われているので、その応用ではないか、と教えてくださいました。娯楽として読んでいますが、書く方も読む方も知的な営為なのですね。



また、黄表紙のような娯楽の文芸であっても、「知」のアンソロジーのような側面があります。慣用句や古典の知識を下敷きにした遊びや、最先端の情報を入れ込んだ絵の数々⁵……

読者のレベルは様々だったと推測されますが、この作品を読んで慣用句を学びつつ、「体内にはこんな国があるのだ」と思っていた人もいるかもしれません⁶。

しかしこういった「知のアンソロジー」的な書物は黄表紙に限っていえることではなく、たとえば『源氏物語』の要約本や解説書が多く出版されたことからわかるように、江戸時代の書物と「知」は、密接に関わっていたのでしょう。



⁵ 黄表紙にも、西洋由来の機械や知識が登場することがあります。
⁶ 同様の「腹の内の世界を描く」趣向は様々な作品でも取り入れられている。一方で解剖学についての関心も高まった時期でもあり、十返舎一九『腹内養生主論』（寛政11〈1799〉、国会図書館本

→<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8929758>）では、人間の内臓が擬人化されて登場する趣向がとられている。読者のレベルによって、黄表紙の趣向の楽しみ方に差異があったと考えられる。

2018年12月19日（水）

4、文字と絵

さて、これらの黄表紙を「衝撃」を以て読まれた松平さんは、かな文字と絵の補完性に興味を抱かれたそうです。

一見するとまるで文字も絵の一部のように見える黄表紙。しかも人物の周りにもちょこちょこ書き入れがあり、音読にチャレンジした時には、本当にその順番で読むのが妥当なのか、ということも検討しました。絵も含め、画面全体を捉えなければ黄表紙を読むことはできないのです。

松平さんは、絵と文字がどのような関係性で作品を構成しているのか、あるいはするべきなのか、ということに関心がおありだということで、両者が相互補完的な役割を果たしている黄表紙をご覧になり、さまざま思いを巡らせられたようでした⁷。

そして、くずし字で黄表紙が読めたら面白いだろうな、というご希望をうかがい、次回は是非原本に近い形で黄表紙を読んでみることにになりました。

同じく AIR の山村浩二さん、長塚圭史さんの WS でも黄表紙を扱い、それぞれ山村さんは夢の描き方、長塚さんは黄表紙が出来るまでの過程や作者の登場の仕方にご関心を持たれ、現在取り組んでおられるテーマへとつながってゆきました。

⁷ 松平さんが、文字と絵の関係についてのお考えを語ってくださった記事は、こちらからご覧いただけます。→ないじえる芸術共創ラ

そして松平さんのご関心は、文字と絵の関係性について。同じものを観察しても、全く違う切り取り方があり、感じるインスピレーションもこれほど違うのだと思います。

ボ HP「AIR・TIR について」「松平莉奈さんへ 5 つの質問」
<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist/index.html>